

「ふーっ、なるほど……」

カガミは混んだ早朝の電車の中で他の客と一緒に立ちながら、噂通りなかなか大変なもんだなあ、と呟いた。

時空間旅行者である彼は、さまざまな時代や異世界を渡り歩いては現地の文化や風俗などを気まぐれに体験してみたり、現地住民を弄って遊んでみたりと、気ままに楽しんでいる。

今日はふと、『早朝の通勤電車』というやつを体験してみたくなって、こうして現地の勤め人や通学生たちに混じっているというわけだ。

もちろん、彼は勤め人ではないので、この後会社に行ったりはしない。

他にも面白そうな観光場所を見繕ってあるので、しばらく乗った後はその近くで降りて、物見遊山でもして歩くつもりでいる。

（ええと。目的の駅までは、あとどのくらいだったかな……？）

彼がそう考えた時。

突然、すぐ近くで若い女性の叫び声が上がった。

「きゃああ！！ この人、痴漢です！ 誰か、次の駅で駅員さんをお呼びください！」

「うん……？」

痴漢。

（確か、同意なく体に触れる、この世界での触法行為のことだったかな？）

などと考えながら、声の方を見る。

すると、その女性はなぜか、カガミの方を指差していた。

「……えっ？ 僕？」

もちろん、身に覚えなどない。

きょとんとしていると、横合いから若い男が割って入ってきた。

「サクヤ、大丈夫か。……おい、アンタ何やってるんだ？ こんご時世だ、こんなことしといて、ただじゃ済まないからな！」

そうまくし立て、カガミに詰め寄る。

「怖かったよ、レイジい……！」

先ほどの若い女性が、その男の陰に隠れるようにして、涙声をあげる。

事態に気付いた周囲の乗客たちが騒ぎ出した。

「……うーん？」

何やら唐突に予想外の事態に巻き込まれて、カガミは首を傾げる。

とはいえ、彼には動揺も焦りもない。

別に不快でもない。

思いがけず物珍しい現地風俗を体験できることになったわけで、ちょっと面白いことになりそうだ、むしろラッキー、というくらいの感覚である。

少なくとも、目的地へ着くまでの退屈しのぎにはなることだろう。

「……おい。なんだよ、その態度は？」

カガミの妙に動じない態度に、目の前の、レイジと呼ばれた男の眉がひくついた。

しかし、彼はすぐに軽蔑的な笑みを浮かべると、さらに声を張り上げる。

「まさか、とぼける気なのかよ？ お前、サクヤがこんなに怯えてるのが見えねえのか！？」

「うう……、ひっく……」

レイジの言葉に合わせるように、サクヤは顔を覆ってしゃくりあげ始めた。

「怖かったよお……、急に……っ」

カガミのあまりに他人事な態度と、少女の嗚咽。

その対比は、周囲の乗客の同情を完全にサクヤへと向けさせた。

「うわ、サイコパスかよ、あいつ」

「反省の色ゼロじゃん。サイテー」

そんな囁きが、じわじわと車内に満ちていく。

非難の色を隠そうともしない何人かが、スマートフォンをカガミに向け始めていた。

そんな周囲の反応に興味深く眺めながら、カガミは肩をすくめた。

「んー。そう言われても、全然身に覚えがないけど？ 勘違いなんじゃないかな？」

そう答えながら、怯えてるのが見えねえのか、と言われたので、サクヤという名らしい女性のほうに目を向ける。

一見して怯えて顔を覆っているようだが、しかし、よく見るとその指の隙間から、こちらに視線が向けられているようだ。

あるいは気のせいかもしれないが、その視線は怯えているというよりも、むしろ面白がっているようにも思える。

それにレイジという男も、このサクヤとかいう、友人だか彼女だかがひどい目にあわされて激昂したにしては、先ほど一瞬浮かべていた軽蔑的な笑い顔は不自然なように思える。

カガミは、これはどういうことだろうと小首を傾げて少し考えて、ああ、もしや、と思い当たった。

「それとも、勘違いじゃないんだとしたら、もしかして虚言とか？ だとしたら、結構上手なもんだねえ」

そう言いながら、ポケットにさりげなく手をつっ込んで、そこに入れてある道具類の中からどれを使おうか、と考える。

「きょ、虚言……！？ ひどい……！」

カガミの言葉に、サクヤはわざとらしく目を見開いてみせた。

「わたし、こんなに怖い思いをしているのに……！ あんまりです……、う、うう……、っ！」

まるで信じられない侮辱を受けたかのように唇を震わせ、涙まで溢れさせている。

だが、その瞳の奥には、カガミの冷静さを試すような好奇の色が揺らめいていた。

「てめえ！ いい加減にしろ！」

レイジはカガミの胸ぐらを掴まんばかりに一步踏み出す。

「サクヤに謝れ！ 土下座して謝れよ！」

だが、その怒りも義憤も、本物ではなかった。

むしろ、カガミが反抗的な態度を取るほどにこの『ゲーム』が面白くなるのだとでも言うように、口の端が歪んでいる。

「なんだ、あいつ？」

「反省してないどころか、被害者を侮辱してるぞ」

「うわー……」

周囲の空気は、完全に敵意へと変わった。

何台ものスマホのカメラが今や躊躇することもなくカガミへと向けられ、カシャ、カシャ、という電子音が、まるで公開処刑の始まりを告げる合図のように響き渡る。

一人の恰幅のいい中年男性が、腕を組んでさりげなくカガミの退路を塞ぐように、出口に向かう側に陣取った。

「んー。そうだねえ……」

カガミはそんな周囲の動きを横目に見ながらも、まるで焦った様子はない。

実際、どうやって遊ぼうかなあと、楽しく考えていた。
(まあ、まずは誤解か演技か、その辺がどうなのかを確かめて
おこうかな?)

内心でそう考えをまとめると、ポケットから小さな香水瓶の
ような『万能噴霧器』をそっと取り出して、無味無臭の強力な
自白ガスをさりげなく、軽く一吹き。

目の前で詰め寄ってくる男とその陰にいる女、二人に吸わせ
るくらいなら、これで十分だ。

このガスを吸った者は警戒心がなくなり、質問に対しては素
直に事実を答えることしかできなくなる。

即効性で、効果も抜群だ。

「……で、実際のところどうなの？ それは演技なのか、それ
とも、勘違いして本気で怒ってるのか、どっち？」

カガミが香水瓶を取り出したことに、誰も気づかなかった。

胸ぐらを掴もうと前に出たレイジと、泣きじゃくるサクヤと
が、ふわりと漂った無色の気体をわずかに吸い込む。

次の瞬間、二人の目に宿っていた演技がかった光が、ふっと
消えた。

どこか焦点の定まらない、虚ろな表情になる。

「あ？ ……演技に決まってるだろ」

掴みかかろうとしていた腕が、だらりと下がった。

さっきまでの怒号はどこへやら、気だるげな、素の口調でぼ
つりと答える。

「泣き真似がうまいんだよ……あいつは」

その目はカガミを見ているようで、どこか焦点が合っていな
い。

サクヤもピタリと泣き止み、顔を上げた。

その顔はまだ涙で濡れたままだが、演技が抜け落ちて、どこ
かぼかんとしたような表情になっている。

「……うん、演技だよ。レイジがやれって言ったから。今日はあの男がいい、若いから手持ちの金はそこまでかもだけど、世間知らずそうだからビビッてすぐに払うだろうし、反応もきっと面白い、って話になってさ……」

義憤に燃えていた青年と被害を受けて怯える女との、突然の豹変。

それを受けて、車内の空気がたちまち凍りついた。

今までカガミを糾弾していた乗客たちは、何が起きたのか理解できず、ただ哑然として二人を見つめている。

スマホを構えていた若者たちも、はっとして録画を止めると、画面と二人とを交互に見比べた。

「ほほう、やっぱりねえ。金目当てかあ。僕から慰謝料とか、示談金とかってやつを取る気だったってことかい？」

当のカガミだけがうろたえるでもなく、得心したようにうんうんと頷きながら、質問を続ける。

二人とも、ぼんやりとした顔つきのままで、気だるげに、それに答え続けた。

「そうだ。慰謝料。がっぽりふんだくって、遊ぶ金にするつもりだよ……」

「今日は、ってことは、これまでに？」

「うん……。この時間帯、人の多い路線に乗れば、必ずカモを引っかけられるから……。あたしの泣き真似は、上手だって評判なんだよね……」

「へえ。そういうものなんだ」

「ああ……。人生なんてイージーゲームだよ……。俺らみたいに顔が良くて、口がうまくて、要領も良いやつにだけ都合がいいようにできてるんだよ。世の中ってのは、そういうもんなんだぜ」

「そうそう。ちょっと脅して、泣き真似して、スマホ回して、みんなに拡散してもらっただけで、お金がもらえるなんて。まあ、お金なんかなくても、あたし、元々スタイルいいし可愛いし、オーラがあるし、周りの人は自然とひれ伏しちゃうんだけど……。才能だよな」

周囲の乗客たちは、二人の告白に驚愕し、呆然としている。

そして、ざわざわと囁きかわし始めた。

「……は？」

「え、どういうこと？」

「演技……？」

乗客たちの間に、突然の痴漢騒ぎが起こった時以上の困惑と動揺が、さざ波のように広がっていく。

カガミに向けられていた非難の目は、今や信じられないものを見るように、仕掛け人の二人へと注がれていた。

さっきまでカガミの退路を塞いでいた中年男性も、組んでいた腕を解き、呆然と二人を見ている。

車内の空気は、一瞬のうちに反転していた。

「へー。公衆の面前でこっちを変質者の犯罪者扱いにして、金をとろうとしたわけね。悪いとか思わなかったのかなあ？」

カガミはそう言いながら、くすくすと笑う。

「むしろ、面白いとか？　そういえば、そんなようなことも言ってたよね？」

「うん……。悪いなんて、全然……」

サクヤは首をこてんと傾げた。

その仕草は可愛らしいが、ぼうっとして虚ろな笑みは、人形じみたおぞましさも感じさせる。

「面白いよ、すごく。人が追い詰められてくの、最高に面白い……。あたしの演技でみんなが騙されて、そいつがどんどん孤立していくのって、ゲームみたいで……」

一方でレイジのほうは、ぼんやりと薄笑いを浮かべている。
「ああ、金も楽に儲かるしよ……。あいつらがどんな顔するか、ってのも楽しみでさ。いい年こいた大人が絶望して青ざめたり、半泣きになったり、逆ギレしたり、見てて飽きねえんだよな……」

「……うわ……」

「最低な野郎どもじゃねえか」

「なんで急に自白しだしたのか知らねえけど、イかれてやがる」

つい先程までカガミを非難していた乗客たちが、今度は二人に対する軽蔑と嫌悪の囁きをかわし始めた。

何人かの女性客は、サクヤの告白に顔を青ざめさせ、気味悪そうに距離を取る。

スマホのレンズを二人に向け直す者たちもいた。

この『自白』の場面がネットの海に放たれるのも、時間の問題だろう。

「なるほどねえ。それはそれは、いい趣味なことだ」

一方で、被害に遭いかけた当事者のカガミだけは、にこにこと上機嫌そうだった。

実際彼としては、変わった体験をできたうえにインタビューにまで答えてもらってなかなか面白かった、という程度にしか思っていないのだ。

とはいえ、何の危険もなかったとはいえ彼らが自分をハメようとした、つまりは危害を加えようとしたことにも違いはない。

その辺をひっくるめての『お礼』として、彼らにもっと刺激的な体験をさせてあげようとする。

カガミは何人かのスマホがレイジとサクヤの姿を録画し始めているのを横目で見ながら、もう一度『万能噴霧器』を手にとって、噴射するガスを変更した。

今度は、超強力な媚毒ガスに。

「まあ、変態行為はお互い同士でやってよ。いや、他の人相手でもいいけどさ。そういう趣味でしょ、君たち？」

そう言いながら、見えないように、また2人を巻き込む程度に噴射する。

再び無色透明の霧が、虚ろな表情の二人を包み込む。

自白ガスの効果がまだ残る中、新たな薬効が彼らの脳髓を焼き、神経を直接刺激し始めた。

このガスを吸った者は激しく肉欲を掻き立てられ、今すぐにやりたい、何も気にせず余計なことは一切抜きで獣のように交わりたい、という抑え難い衝動に駆られるのだ。

「それじゃ、ごゆっくりー」

カガミは噴射を終えるとすぐに、彼らの邪魔にならないよう、そして注目にこれ以上巻き込まれないように、軽く距離を置いた。

変化は、すぐにあらわれる。

体験版はここまでです
続きは製品版で！